

世はまさに「改革」の時代。いわく行政改革、財政改革、税制改革、そして教育改革、それに福祉の改革……。まさに「改革」の大合唱である。

さて、このような「抜本的」改革やむなし、と皆が思うようになってきた対象（あるいは標的）はすべて、実は戦後国民みんなで作り上げて来たものばかりである。このことは、国会の先生方から庶民の皆さんまで、胸に手を置いて考えれば思い当たることばかりであり、一々その責任を詮索するのも野暮というものであろう。肥大化し縄張り争いに明け暮れる官僚機構、過剰と言われる規制行政にしても、政府におねだり乃至その権威にあやかりたい人々（グループ）と、そのための制度・予算に奔走した政府・国会の関係者との、合作物の集大成である。言ってみれば、どれもこれも、故山本七平氏言うところの「空気の成せる業（ごう）ばかりといえようか。

一方で、世の中がこうも複雑怪奇になると、誰もが放置できぬと思うほどの、衝撃的な事件が持ち上がったとしても、とっさには、それが生じた所以ないし因果関係がそう簡単には見えてこないものも少なくない。例えば、「いじめ」とそれにまつわる悲惨な出来事の続発、あるいは苛烈な受験競争と社会問題に不祥事。「オウム事件」もそうだが、世間はいつもの、衝撃的の出来事に遭遇すると、きまって手近なところから「犯人探し」をはじめめる。この場合、学校の先生の怠慢・父兄の無関心等々がやり玉に上がり、文部省への批判に発展したのち、更に事態への省察が深まるにつれて、根はもっと深いことに気づき、直接の対策とあわせ、他の事態（人材確保等）への要請と相まって、「教育改革」へと世論が展開していった様に見える。しかし、「いじめ」や受験地獄の問題の解決を、「教育」の枠のなかにもとめるのは、正に望蜀の愚に等しいことではないだろうか。紙数の関係で詳論はできないが、一言でいうなら、この問題の背後には、現代日本の企業と社会のかかえる矛盾のすべてが係わっているものと思われる。

さて「改革」の大部分は、教育や福祉のような国内中心のものを除き、国際化に伴う「外圧」から始まっている。前述のように、「改革」の対象の全ては、それぞれその時々「空気」によって出来上がったもの。つまり「空気」が変わらねば、何も始まらないわけであるが、どの「改革」にもそれぞれ受益者と被害者が続出するのは避けがたい。これは明らか。あの、文字通り「崖っぷち」と国民皆が思った、五十年前の敗戦時とちがいで、「金持ち日本」などと煽てられ、頭打ちとはいってもまだまだヌルマ湯の経済環境、国・国民のアイデンティティも乏しいこの横並び社会で、果しているんな「空気」の入れ換えがどの程度出来るものか、まことに心許ない。いや「改革」不成立の場合、どんなになっても、そのツケは国民すべてが負えばいいのだ、と開き直ることもできよう。しかし、事態はそんなに簡単ではない。

「改革」の多くが外圧から始まったのは止むを得ないとしても、解決策のお手本がまた直輸入で、自分の頭で考えたものあまり見当たらないのが気になる。古来日本は、外来の思想や制度を独特の仕方消化吸収し、今日の文化を形成してきた。見てみるとその外来の材料のおおくは、文字通り換骨奪胎され、名は同じでも中身はすっかり変質していることが多いことは、周知の通りである。

ことが料理や風俗、さらに宗教や哲学くらいまでなら、本家本元も、日本民族の「趣味」として看過してくれ、場合によっては過分の評価さえも受けてきたわけであるが、国際的に衆人監視の中で行われようとしている、今回の「改革」は、昔なら戦争にもなりかねない緊張を背景にするだけに、もし同じ「手口」と受け取られる時、これは、取り返しのない、真の国際的孤立を招きかねない、と憂いの増すこの頃である。

97.3.6. 人口開弁
陸軍省